

令和6年度 大阪府環境審議会 第3回 環境・みどり活動促進部会 議事概要

日 時:令和6年10月3日(木)10時00分~12時00分

開催方法:大阪府庁本館5階 正庁の間

出席者:増田委員(部会長)、藤田委員、平井委員、佐久間委員、畑委員

1 開会

2 議題 「みどりの大阪推進計画」の見直しについて

事務局より、現計画の進捗状況、現計画策定後の社会情勢の変化等について説明し、増田部会長、平井委員から話題提供をいただいた。それらを踏まえ、各委員から意見を伺った。委員からの話題提供及び主な意見等は以下のとおり。

■「みどりの大阪推進計画」の進捗状況

- ・ 計画の見直しにあたっては、KPIに基づいた指標の設定が必要。また、アウトプット指標だけでなく、アウトカム指標をどのように設定していくかが課題。(増田部会長)

■話題提供:地歴を踏まえた緑の骨格構造~グリーンインフラのベースとなる~

増田部会長より、地歴を踏まえた緑の骨格構造について、ご説明いただいた。

- ・ 計画の見直しにあたっては、グリーンインフラの考え方が重要。米国では、グリーンインフラのベースとなる「Parks Boulevards and Parkways System」という考え方にに基づき、ネットワーク要素(直線型の並木道や河川・水路などの曲線路)と公園をつなげ、水とみどりのネットワークを構成する緑地体系が展開。
- ・ 大阪府域では、自然の構造(周辺山系、丘陵地、内部の湿潤な埋立地、河川)、歴史的背景を持つ街道、近代の社会・経済事情を背景に整備された放射状道路等が存在。自然特性、社会特性、人文歴史特性、土地利用特性を踏まえ、自然・公園とネットワーク要素(道路、河川等)をどのようにつなげていくかという視点が非常に重要。
- ・ 大阪市域では、みどりの骨格構造として、大川・中之島、淀川、上町台地、大和川といった自然環境、近代に整備された御堂筋がある。上町台地と御堂筋の南北軸、大川・中之島(旧淀川)を中心にした東西軸、これをクロス型のネットワークとして捉えていくことが必要。
- ・ 自然は近隣府県ともつながっていることから、広域的な視点も重要。
- ・ 計画期間は15年など比較的短い期間で策定されるが、将来像や方向性は、100年の体系を意識して検討すべき。

■話題提供:大阪府下の自然と生き物の関係

平井委員より、都市部における生物多様性を育むみどりや里山の役割について、生物の視点から、具体的な事例を交えてご説明いただいた。

- ・ 大阪府のレッドリストに掲載されている昆虫類について、グループ(目)ごとに2000年と2014年の掲載種数を比較したところ、コウチュウ目(カブトムシやゲンゴロウ等)は約2.5倍、チョウ目やトンボ目は約2倍に増加。次の改訂では、掲載種数がさらに増えると思われる。
- ・ 生息環境別にみると、河川敷・海浜、湿地(ため池、水田含む)に生息する種数が約3倍に増加。改修や埋め立て等で生息域が失われていることによるものと思われる。
- ・ 絶滅危惧種の1つシルビアシジミについては、大阪伊丹空港で多数生息が確認。空港内に良好な草原が広く残されているため生き残っていると思われる。また、空港周辺の緑地にも、

パッチ状に生息が確認。メインの生息地(空港)から行き来することによって個体群を維持。

- ・ギフチョウは、現在、府内の数か所のみで生息。そのうち1か所では、2013年頃にほとんどいなくなったため、現地の個体を飼育繁殖させて戻す「補強」を実施したところ一時回復。しかし、近年、鹿の影響で個体数が再び減り始めている。鹿の影響は、大阪だけでなく日本全体の生物多様性にとって大きな問題。
- ・地黄湿地のハッチョウトンボは、一時期、絶滅するといわれるくらいまで減ったが、公益財団法人を中心に環境改善が行われ、回復の兆しがみられている。

■補足説明:「積水ハウス株式会社 新・里山」

畑委員より、事務局説明で都市部のみどりの参考事例として紹介した「新・里山」について、ご説明いただいた。

- ・新・里山の計画にあたって一番力を入れたのは管理部分。整備後の維持管理が非常に重要であること考え、管理マニュアルを作成。
- ・1つの例として、雑草の管理がある。日常の管理作業でいえば、雑草を一斉に刈り取った方が効率的だが、パッチ状に刈っていくことをマニュアル化。「5本の樹」計画では、日本の在来種・原種の樹を植えることを進めているが、樹木のことだけを考えていても生物多様性にならない。雑草を適度に残すことで、土壌中の微生物や小動物の生息環境が維持され、生態系ピラミッドの一番の下の分解者の裾野が広がり土壌が豊かになる。そうすることで、雑草や樹が豊かになり、様々な昆虫や小鳥が飛来し、捕食者となるタカやミミズクなどがやってくる。そうして生態系ができる。そのための基盤をしっかりとつくるということをマニュアル化した。

■意見交換

平井委員

- ・コリドーやクラスター構造は、生物多様性にとっても大事。自然共生サイトに認定された「堺第7-3区共生の森」には、大阪ではここにしかない大阪の絶滅危惧種が多数存在。奈良県には生息している種なので、大和川を介して移動し留まるようになったと推察。
- ・都市の真ん中にある緑地にも絶滅危惧種がみられることがある。大阪は、淀川や大和川に囲まれていることで、都市部でもビオトープや良好な緑地があると、生き物が自然と集まりやすい環境(都市構造)になっているのではないかと推察。

増田部会長

- ・公園緑地と並木道や河川を含む緑道をつなぐネットワークづくりが重要。
- ・農地や里山のような2次的自然の再生や維持は生物多様性にとっても、人との関わりにとっても大事。2015年に都市農業振興基本法が成立し、農地の位置づけが変わった。農地や里山をどのように位置付けるか。環境政策、農業政策、森林政策を一体的に捉え検討していくことが必要。
- ・公園については、パーク型、フォレスト型の公園をつくっていかないといけない。ニューヨークのセントラルパークのように田園環境(パーク型)をどう創成するかを考えていくことが必要。

畑委員

- ・緑化の推進にあたっては、整備後の管理をどうするかという課題になるが、農地が緑地として位置付けられると、その管理は、農業従事者や貸し農園を借りている人が行ってくれる。市民農園では、最近、無農業にこだわる人も増えており、土壌が豊かで生き物たちが復活しているところもある。
- ・大きな緑地も重要だが、1軒1軒の家の緑も大事。小さい点が集まることで点が線になり線が面になる。

佐久間委員

- ・計画におけるみどりの位置づけの説明が必要。府民にとっては、都市・まちづくりの戦略上の必要性から語る方が理解しやすいと思う。

- ・農地の話も非常に大事。都市計画・まちづくりでは、立地適正化計画制度によって都市をコンパクトにすることで、また市街化調整区域によって開発を調整することで、農地を保全することが期待されているが、一定の条件で開発を行うことは可能。例えば、泉州エリアにおいては玉ねぎが都市の戦略上重要だが、行政の分野間の連携がうまくいっていないと、玉ねぎの農地がなくなってしまっているということになりかねない。農地とみどりの行政が連携して、農地保全について都市計画側に働きかけていくような打ち出しができるとう良い。

増田部会長

- ・大阪の都市戦略や成長戦略上、みどりをどう考えていくのか。大阪が本来の国際都市になるためには、どのようにみどりを位置付けていくか。という視点が重要。
- ・現計画では、みどりが本来持つ効果として、存在・利用効果(オンサイト効果)と媒体効果(オフサイト効果)がある。大都市にとっては、オフサイト効果をどのように展開していくかが重要。

藤田委員

- ・世界の中の大阪として視点が重要。それぞれの主体がそれぞれ何かできるのか。どう連携していけるのか。将来、こういう大阪にしたい。というビジョンがあった方が良い。
- ・近年、「ワンヘルス」という考え方も注目されており、環境保護や健康づくりにおいて、人と野生動物・自然がどのように協働してよりよい社会にしていくのか。という視点も必要。
- ・ため池をどうするか。ため池の多面的機能を、みどりの観点から見る視点も必要。
- ・農地や林業について人材育成も含め、どのように継承していくべきかについて議論が必要。

増田部会長

- ・国際的視点、グローバル化の中での戦略としてという位置付けは必要。
- ・気候変動への対応としては、これまでは、ヒートアイランド対策、主に適応策を進めてきたが、今後は、ゼロカーボンに向けた視点が不可欠であり、緩和策もしっかりと考えていくべき。
- ・面積は森林エリアが5万 ha、農地が1.2万 ha、公園が5,000ha。緑の資源という視点からも、まず林地、その次にため池を含めた農地、公園という形での戦略立てが必要。
- ・課題整理として進行管理を具体的にどうしていくか。市民・府民向けにどのように実行していくのか。進行管理するためのKPIをどう設定するか。といった検討が必要。
- ・生物多様性や生態系は、周辺地域とつながりを有していることから、広域的な視点が必要。また、今回の都市緑地法の改正で、市町村のみどりの基本計画と国の基本方針及び都道府県の広域計画の連携が初めて示されたことから、市町村に対する視点も必要。
- ・予算面では、これまで建設や整備が中心であったが、新規整備は困難な時代になっており、マネジメント型への移行が必要。みどり施策では、管理は不可欠な要素であり、戦略としてどう考えていくかが課題整理として認識が必要。

藤田委員

- ・GX、DXなどの技術が進歩している。主体である事業者にそうしたことを得意とする人たちを増やしていくために、どのような伴走型のサポートを取り入れられるか。実効性を高めるためにも昨今の経済情勢の変化をふまえた議論も必要。計画の実行性を高めることが重要。

畑委員

- ・府民に目を向けると生物多様性に関心を持つ人は多くない。税金を使ってやること。府民が関心を持つ点としては、温暖化。温暖化への貢献が見える化。健康にも関心がある。健康に対してみどりがどういう影響を与えているか。今ある財産の見える化は重要。大人向けもそうだが、子ども向けも大事。環境学習。森林、農地、公園があるときはCO₂がこれだけ削減できているが、ない時はどうか。当たり前享受できていることに対して見える化。こんなに良いことならもっと税金使ってもいいよね。という話が必要。

3 閉会

以上